

「福間松碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文
福岡〇二	福間松	佐々木之清	山田時文
			碑記揮毫
			佐々木之清

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一八〇六・文化三	北九州市門司区大里本町	西生寺	

一. はじめに

本石碑は、戦国時代毛利氏に仕えた福間元明の功績を顕彰するため、元明の子孫が、元明が戦死した地に立てたものである。

○写真1 石碑全体



○写真2 「碑記」部分



二 翻刻並に訳注

■翻刻

◎題額

(正面)

福間松

◎碑記

(左側面)

福間松在豊大里濱考其所以得名福間元明君者藝人清和帝之裔也其先
邑于紀福万遂氏焉後万更間君年十六始仕洞春公爲贄御也勇捷善戰永
祿癸亥雲白鹿城之役藝兵穿爲地道城中亦穿地橫截之君先入其中槍枝
掛炬照道而前忽見一人容貌瑰偉有称身白久盛激戰君進交槍刺而斃焉
於是衆乘勝前城陷已已周茶白山之役君騎先亂川斬大將大内輝弘天正
丙子織田氏兵圍撰本願寺寺中食乏天樹公命士轉漕救之敵水次拒之君
(背面)

躍入敵船擊殺數十百人遂得輸焉是歲備阿部川拘山中鹿介君素善游引
彼深處殪焉丙戌豊王征伐九州天樹公發兵援之陣于長赤馬關越八月二
十六日命某氏者先渡于豊君監其軍在前船達于大里濱敵之伏起某氏者
驚遽而逃君奮然以爲此吾效節授命日也上濱挑戰有一勇士相前槍接君
鈎而倒之既而扶起縱之以賈餘勇無敢近者忽中鳥銃終焉年四十八從士
瘞骸種松以爲表矣土人因呼曰福間松云君從初臨戰至此功之大者十三
所獲皆勁敵事蹟詳于簡策天明乙丑二百年祀八世孫政幸君來弔於此掇
(右側面)

松子數枚歸後建祠第中藏之爲主追諡楨幹明神其嗣政方君今此樹石畧
誌先勲又政幸君之志云文化丙寅秋八月

長門 山田時文拜選

福間家臣佐々木之清謹書

***囿**は、現碑が摩滅して判読しがたいところで、先行研究により推測して補った。

*異体字など

○陷 陷。 ○年 年。 ○久 久。 ○騎 騎。 ○拘 拘。 ○功 功。

○畧 略。

■訳注

●本文 (いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した)

福間松、在豊大里濱。
考其所以得名。

福間元明君者、藝人、清和帝之裔也。

其先、邑于紀福萬、遂氏焉。後滿更間。

君年十六、始仕洞春公、爲贄御也。

勇捷善戰。

永祿癸亥、雲白鹿城之役、藝兵穿爲地道、城中亦穿地橫截之。

君先入其中、槍枝掛炬、照道而前、忽見一人容貌瑰偉、有稱身白久盛。

激戰、君進交槍、刺而斃焉。於是衆乘勝前、城陷。

巳巳、周茶臼山之役、君騎先亂川、斬大將大内輝弘。

天正丙子、織田氏兵圍攝本願寺。

寺中食乏。天樹公命士、轉漕救之。

敵水次拒之。

君躍入敵船、擊殺數十百人。遂得輸焉。

是歲備阿部川拘山中鹿介。

君素善游、引彼深處殪焉。

丙戌、豐王征伐九州。天樹公發兵援之、陣于長赤馬關。

越八月二十六日、命某氏者先渡于豊。君監其軍在前。

船達于大里濱、敵之伏起某氏者驚遽而逃。

君奮然以爲、此吾效節授命日也。

上濱挑戰、有一勇士相前槍接。

君鈎而倒之。既而扶起、縱之以買餘勇無敢近者。

忽中鳥銃、終焉。

年四十八、從士瘞骸、種松以爲表矣。

土人因呼曰福間松云。

君從初臨戰至此功之大者十三、所復皆勁敵事蹟詳于簡策。

天明乙丑、二百年祀、八世孫正幸君來弔於此、掇松子數枚歸。

後建祠第中、藏之、爲主追諡楨幹明神。

其嗣政方君、今此樹石、略誌先勲又政幸君之志云。

文化丙寅秋八月、

長門山田時文拜選

福間家臣佐々木之清謹書

●訓詁

福間松は、豊大里の濱に在り。

其の名を得る所以を考するに、

福間元明君は、藝人、清和帝の裔なり。

其の先、紀の福萬を邑とし、遂に焉これを氏とす。後ち、滿を間に更む。

君年十六にして、始めて洞春公に仕へ、贄御となる。

勇捷善戰す。

永祿癸亥、雲の白鹿城の役、藝兵穿ちて地道を爲る。城中も亦た地を穿ちて之を横截す。

君 先に其の中に入り、槍枝に炬を掛け、道を照して前すすむ。
忽ち一人の容貌魂偉なる、身白久盛と稱する有るを見る。
激しく戦ひ、君進みて槍を交へ、刺して焉たふを斃す。

是において、衆勝ちに乗じて前み、城陥つ。

巳巳、周の茶白山の役、君が騎 先に川を亂し、大將大内輝弘を斬る。

天正丙子、織田氏の兵、攝の本願寺を圍む。

寺中食乏し。

天樹公 士に命じ、轉漕して之を救はしむ。

敵 水次にて之を拒む。

君 敵船に躍り入り、數十百人を撃殺す。遂に輸するを得たり。

是の歳、備の阿部川に山中鹿介を拘す。

君 素と善く遊び、彼を深き處に引きて殪たふす。

丙戌、豊王 九州を征伐す。

天樹公 兵を發して之を援し、長の赤馬關に陣す。

越して八月二十六日、某氏なる者に命じて、先に豊に渡らしむ。

君 其の軍を監して前に在り。

船の大里の濱に達するや、敵の伏起せる某氏なる者、驚遽して逃ぐ。

君 奮然として以爲おもへらく、此れ吾の節を效し命を授くるの日なり、と。

濱に上り戦ひを挑む。

一勇士の相ひ前みて槍接する有り。

君 鈎して之を倒す。既にして扶起して之を縦ゆるす。

餘勇を賣うるを以て、敢へて近づく者無し。

忽として鳥銃に中あたり、焉に終ふ。

年四十八なり。

従士 骸を瘞うづめ、松を種えて以て表となせり。

土人因りて呼びて福間松と曰ふと云ふ。

君初めて戦さに臨みてより、此に至るまで、功の大なる者十三、獲るところは皆勁敵なり。

事蹟は簡策に詳つまひらかなり。

天明乙丑、二百年祀に、八世孫政幸君、來りて此に弔し、松子數枚を掇ひろひて歸る。

後ち祠を第中に建て、之を藏して主となし、「楨幹明神」を追諡す。

其の嗣政方君、今此こゝに石を樹たて、略ほぼ先勲また政幸君の志を誌すと云ふ。

文化丙寅秋八月、

長門の山田時文、拜して選す。

福間家臣佐々木之清謹んで書す。

●人物

○福間元明 天文八（一五三九）年から天正十四（一五八六）年。幼名松若、通称彦右衛門。父親の信治（明応二（一四九三）年から弘治二（一五五六）年）が毛利家に仕え、元明も天文二十一（一五五二）年から毛利元就に仕え始め、兄の堯明が天文二十三（一五五四）年に死んだことから元明が後継ぎとなる。碑文で述べられている白鹿城攻め、大友輝弘の乱などで活躍し、輝かしい成果を上げた。天正十四年の九州攻めにおいて、豊前の国

大里で戦死した。元明関連の文書は「萩藩閥閥録」に収録されているが、その中に、福岡元明自身が自分の活躍と戦果について書き記した文書がある（以下「元明文書」。「萩藩閥閥録」巻八十三所収）。

○清和帝 清和天皇。嘉祥三（八五〇）年から元慶四（八八一）年。諱は惟仁。文徳天皇の第四皇子で、母方の祖父藤原良房の後見のもと、天安二（八五八）年に九歳で即位。貞観十八（八七六）年に第一皇子（陽成天皇）に譲位し、元慶三（八七九）仏門に入り、翌年崩御した。武門の棟梁となる清和源氏の祖。

○洞春公 毛利元就。明応六（一四九七）年から元龜二（一五七二）年。安芸の国人領主毛利弘元の次男。大永三（一五二三）年家督相続。次男元春、三男隆景を、それぞれ吉川家・小早川家に養子として送り込んで勢力を伸ばし、天文十九（一五五〇）年に有力家臣井上氏を誅殺して家中支配を確立。同二十四（一五五五）年には、主君大内義隆を殺害した陶晴賢を厳島の戦いで破り、周防・長門を掌握した。永禄九（一五六六）年には尼子氏を滅ぼし、中国地方の大半を支配下においた。戒名は、洞春寺殿日頼洞春大居士で、のちには洞春公と呼ばれた。

○身白久盛 尼子家の家臣。「元明文書」には「身白大藏」とあった。

○大内輝弘 永正十七（一五二〇）年から永禄十二（一五六九）年。通称、太郎左衛門尉。大内家第十四代当主大内政弘の孫。父の高弘は謀反を起こし、失敗の後、九州の大友氏の元へ亡命した。輝弘も豊後で生まれ育った。永禄年間、大友宗麟と毛利元就が争った際に、大内家の一族である輝弘は大友方の一将として周防に上陸し、山口を占拠した。しかし、反転してきた毛利軍に破れ、自刃した。

○天樹公 毛利輝元。天文二十二（一五五三）年から寛永二（一六二五）年。元就の長子隆元の長子。父隆元が永禄六（一五六三）年に亡くなると、十歳で家督を相続した。天正四（一五七六）年には足利義昭を奉じて織田氏と対抗し、石山本願寺を救援した。のち織田氏と和睦し、豊臣政権下では、四国平定、九州平定の先陣をつとめた。関ヶ原の戦いでは西軍の盟主とみなされ、戦後、防長二国に減封される。戒名は、天樹院殿前黄門雲巖宗瑞大居士で、後の者からは天樹公と呼ばれる。

○山中鹿助 あるいは鹿之助。生年は不詳だが天文十四（一五四五）年ごろとする説がある。没年は天正六（一五七八）年。諱は幸盛。代々出雲尼子氏に仕え、鹿助自身は、永禄二（一五六〇）年に尼子義久に従って初陣を果たす。以後尼子家の武将として活躍するが、同九（一五六六）年に、尼子氏は毛利軍によって一旦滅ぼされる。そののちも、織田信長と通じながら尼子家再興運動を続けるが、天正六（一五七八）年に尼子再興軍は壊滅し、尼子勝久は処刑、鹿助も毛利輝元の下へ連行される途中で殺害された。衰亡した主家に忠誠を尽くして戦い続けたとして、江戸時代に「忠義の臣」として講談などに取り上げられた。明治以降も武士道を精神的な柱とする国民教育の題材とされ、「立川文庫」で取り上げられるなど、大衆の人気を集めた。

○政幸、政方 福岡氏。不詳。

○山田時文 宝暦七年から文政三年。時文は諱、字は運平、号は北海。藩校明倫館で学ぶ。安永九（一七八〇）年に、筆頭家老宍戸家に招聘され家臣となる。寛政十一（一七九九）年に行われた「藩主上聴（藩主への経の講義）」をつとめていた。萩藩では、毛利本家と血縁関係にある有力家臣を「一門」と称し、その一門の各家は知行所内に学校を設けていた。宍戸家では文化六（一八〇九）年に徳修館を開設したが、山田はその教授となった。

文政元（一八一八）年には、隣里の義僕六松を顕彰する石碑の碑文を撰述し、賞を受けている（石碑は現存するようだ）。詩文集に「北海集」六巻がある（本碑文未収録）。

○福岡家臣佐々木之清 不詳。

●注

○豊 ここでは豊前国。今の福岡県東部と大分県西部からなる。北九州市は、小倉と門司が豊前で、戸畑・八幡・若松が筑前であった。

○大里濱 今の門司区大里本町。関門海峡の本州側下関の対岸にあたる。

○藝 安芸国。今の広島県西部。

○邑 家臣が与えられた采地。ここではそこを領地とする。

○紀 紀伊国。今の和歌山県。

○福萬 地名だが不詳。

○贅御 鞭を執り馬を御す。御者。ここでは馬廻組。主君の乗った馬の周囲にあつて警護を役目とする騎馬の侍。戦国時代には制度化されていた。

○勇捷 熟語は無いが、勇ましく敏捷なこと。あるいは勇ましく勝利を収めること。

○善戦 戦いがうまいさま。

○永禄癸亥 六年、西暦一五六三年。

○雲 出雲国。島根県東部。当時尼子氏が根拠としていた。

○白鹿城之役 永禄六（一五六三）年八月から同年十月にかけて、毛利軍と尼子軍との間で起こった攻城戦で、その舞台が白鹿城（現在の島根県松江市法吉町）であった。ここは尼子氏の居城月山富田城を守る主要な城「尼子十旗」の第一。日本海方面からの補給路を確保する上でも重要な拠点であった。激戦の末、十月中旬に白鹿城は落城。以後尼子氏は力を失い、同九（一五六六）年十一月、毛利の軍門に降った。

「元明文書」には「嶋根白鹿之城被成御取詰候時、らんとうの尾より仕寄穴を御掘せ被成候……、穴の内へ敵出合候てせり合御座候時、先立て來かせき候敵の内、身白大藏と申者を討て首をとり申候、其勢に敵の横穴を此方に取、敵を悉追込、穴之内のせり合御利運に相成り申候事」とある。

○藝兵 藝は安芸、広島県東部。即ち毛利軍。

○穿爲地道 トネルを掘る。石見銀山の鉱夫を動員したといわれる。

○横截 熟語は無いが、截は、断ち切る、分断攻撃をする。横截で、毛利方が掘ったトンネルに対し、横からトンネルを掘って分断しようとした、くらいか。

○容貌魁偉 顔や体があっしりとして立派なさま。

○巳巳 永禄十二（一五六九）年。

○周 周防の国。今の山口県東部。

○茶臼山之役 弘治三（一五五七）年に大内氏は滅亡したが、その再興をはかる運動はのちも続き、永禄十二（一五六九）年に一族の大内輝弘が挙兵し、周防の国の山口に依った。九州侵攻を行っていた毛利元就は急遽帰国し、大友軍を次々に撃破。輝弘は逃亡を図ったが、万策尽き、茶臼山で自刃した。その輝弘の首級をあげたのが元明だった。

「元明文書」には「大内太郎左衛門輝弘富海（周防）の打石にて切腹仕候時、山口よりの追手之衆大勢山へ取上り候、一番に追懸、山へ上り早々追付申候、證拠に輝弘頸を取申候事」とある。

- 亂川 熟語も無いが、「川を乱す」は、「川をかき乱す」で、戦乱の場に身を躍らせることか。
- 斬大將大内輝弘 「元明文書」では、元明は、自刃した輝弘の遺骸を回収し首をあげたとある。
- 天正丙子 四年、一五七六年。
- 織田氏兵 織田信長軍。
- 攝 摂津の国。今の大阪府南部。
- 本願寺 石山本願寺。大坂にあった。浄土真宗八世蓮如の建立。天文元（一五三二）年に山科の本願寺が織田信長によって焼き討ちされたのちは、ここが本山となった。浅井朝倉氏など反信長陣営が活発化すると、本願寺もこれに呼応して元亀元（一五七〇）年に対信長戦争を開始。以後足利義昭や武田信玄なども連合し信長を苦しめた。これを石山合戦といい、本願寺が降伏して石山を退去する天正八（一五八〇）年まで続いた。
- 轉漕 食糧などを運ぶこと。
- 「元明文書」には「大坂川口にて敵之番船被成御切取候時、船中にてのせり合に敵船へ取乗、敵一人討頸取申候事」とある。
- 水次 水辺。
- 撃殺數十百人 「元明文書」では、敵一人の頸を討ち取った、とある。
- 輪 運漕する。
- 備 吉備の国、備前備中（今の岡山県西部）備後（今の広島県東部）。
- 阿部川 諸資料には「備中国合（阿井）の渡（今の岡山県高梁市）」で討たれたとある。「元明文書」には、「山中鹿介をあいの渡りにて被仰付候時、鹿介淺手を負川中へ飛込、向之地へ取渡り可申躰に相見へ候時、一番に川へ追付飛込、川中にてくミ候て鹿介頸取申候事」とある。
- 善游 泳ぎが得意である、
- 殪 殺す。
- 丙戌 天正十四（一五八六）年。
- 豊王 豊臣秀吉。
- 援之 支援というレベルではなく、毛利家は九州攻めの先陣を取った。
- 長 長州。今の山口県西部。
- 赤馬關 下関。馬関とも言った。
- 監 監軍。軍隊を監督する役目。
- 在前 最前線にいた。
- 伏起 ひそみ隠れていて急に立ち現れる。
- 驚遽 驚き慌てる。
- 奮然 奮い立つさま。
- 効節 効節に同じ。忠節を差し出す。忠義を尽くす。
- 授命 命がけで尽力する。「論語」憲問に「見利思義、見危授命（利益を前にして正義を考え、危険を前にして一命を捧げる）」とある。
- 槍接 槍合わせ。槍を接触させて戦うこと。
- 鈎 ひっかける。鎌のついた槍で引っかけたのか。
- 扶起 熟語は無いが、扶け起こす、

- 縦 ゆるす、見逃す。
- 賈餘勇 賈は、買うと売る。餘勇は、ありあまった勇氣。賈餘勇で、人に売るほど有り余る勇氣。
- 忽 突然、思いがけず。
- 鳥銃 小銃、こづつ。
- 從士 家来。
- 瘞 隠し埋める。
- 種 植える。
- 表 しるし。
- 土人 その土地の人。
- 獲 捕虜にするの意もあるが、ここでは首級を獲るだろう。
- 勁敵 強い敵。
- 簡策 文字を記した木竹簡。転じて紙に書かれた文書。具体的には「元明文書」だろう。
- 天明乙丑 天明年間に乙丑の歳は無い。「門司市史」は「乙巳」の誤りか、とする。これに従う。天明乙巳は、元年、西暦一七八一年。元明の戦死の百九十五年後。
- 掇 拾う。
- 松子 松の種。まつぼっくりか。
- 枚 モノを数える数詞。平たいモノに限らない。
- 箒中 屋敷の中。
- 主 位牌、靈位。祀りの対象。
- 追諡 死後にあらためて送る諡。
- 楨幹 どちらも土塀の建築に用いる木製の柱と板。転じて物事を支える根本、基礎。元明が毛利家の基礎を成した欠かせない人であったことを称える。
- 明神 神を尊崇した表現。元明を祠に祀ったので「明神」の呼称を附したのか。
- 樹石 石碑を立てる。
- 略誌 概略を記述する。
- 先勲 先祖（ここでは元明）の勲功。
- 文化丙寅 三年、西暦一八〇六年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【福間松の由来】

福間松は、豊前の国、大里の浜にある。
以下その名の由来を述べよう。

【福間元明君の出自】

福間元明君は、安芸出身の人で、清和天皇の末裔である。
その先祖は、紀伊国の福方というところを領地として治めており、ついにその福方を氏として名乗るようになった。さらにのちに、万を間に改め、福間を氏とした。

【元明君の出仕】

元明君は、十六歳のときに毛利元就公のお馬廻りとして仕えた。勇ましく敏捷であり、よく戦い、多くの功績をあげた。

【出雲白鹿城の戦いと元明君の功績】

永禄六年の、出雲の白鹿城の役に元明君は従軍した。

毛利側は、地面にトンネルを掘って城に迫ろうとした。対する尼子側もまたトンネルを掘り、毛利軍のトンネルを横切ろうとした。

元明君は、真つ先にトンネルに入ると、槍の枝に灯火を懸け、道を照らしながら前進した。

すると、突然、身白久盛という容貌魁偉な侍とでくわした。

ふたりは激しく戦ったが、元明君は一步前進しては槍を交え、ついにこれを刺して倒した。かくして勝ちに乗じた毛利軍は雪崩を打って前進し、ついに白鹿城は陥落したのであった。

【周防茶白山の戦いと元明君の功績】

永禄十二年の、周防の茶白山の役に元明君は従軍した。

元明君は、騎馬で戦場を駆け巡って敵を混乱に陥れ、敵の大將大内輝弘の首を取った。

【摂津石山本願寺への補給と元明君の功績】

天正四年、織田信長の軍隊が摂津の石山本願寺を包囲した。そのため、本願寺では食糧が欠乏し、困難に陥った。

毛利輝元公は、本願寺を救済するために、家中の士に食糧などの転漕を命じた。

しかし、敵の織田方は水辺に軍を敷いて転漕を阻もうとした。

そこで、元明君は敵の船に飛び移ると、敵兵数百人を打ち倒した。

そのために、無事に食糧などを本願寺に送ることができた。

【山中鹿之助討伐と元明君の功績】

この年、天正四年、備中阿部川（阿井の渡し）に、尼子氏の残党である山中鹿介を拘束していた。

（鹿之助は、逃亡を図り、渡しを泳いで渡ろうとした）

元明君は元々泳ぎが得意であったので、泳いで鹿之助に追いつき、彼を河の深みに引き込んでこれを殺した。

【豊臣軍の九州上陸作戦と元明君の功績】

天正十四年、豊臣秀吉が九州征伐に乗り出した。

毛利輝元公は、軍隊を差し向けて豊臣軍の先陣となり、本州側の最前線である長門の赤間関に陣を敷いた。

そしてその後八月二十六日に至り、某なる者に命じて、豊前侵攻の先駆けとさせた。

元明君は、軍の監督官として前線にあった。

毛利軍の軍船が九州側の大里の浜に到達すると、ひそみ隠れていた敵の大友氏の家臣某氏は立ち上がり、驚き慌てて逃げ惑った。

それを見た元明君は、奮い立ってこう考えた、

「今日この日こそ、私が忠義を尽くし命がけで戦うときだ」と。

かくして大里の浜に上陸すると敵軍に対し、戦いを挑んだ。

すると大友側からひとりの勇士が進み出て、槍合わせを挑んできた。

元明君はこれに対抗し、槍についた鎌で敵を引き倒した。

そうしておいて、敵を扶け起こして逃がした。

そのありあまる勇壮ぶりに、元明君に近づこうとするものすらひとりもない有様だった。

【元明君の最期と松】

と、突然小銃の銃声が起こり、弾にあたつた元明君は絶命し、ここにその生涯を終えた。実に御年四十八歳であつた。

属従していた従士たちは、その場に主君の亡骸を埋葬し、松を植え目印とした。そこで大里の土地のものは、この松を「福間松」と呼んだという。

【元明君の事蹟】

元明君は、その初陣から大里の浜の戦いに至るまで、大きな功績だけで十三を教え、獲得した首級は皆強敵からのものであつた。

こまごまとした事蹟については、紙に書かれた文書に詳細が記されている。

【八世の孫政幸君による元明君顕彰―二百回忌法要と神格化】

天明元年、元明君の二百回忌において、八世の子孫である福間政幸君が大里浜に来たつて、法要を営んだ。そして福間松の種（まつぼっくり）数個を拾つて持ち帰つた。

のちに自宅の庭に祠を構え、持ち帰つた松ぼっくりをそこに供えた。さらに元明君に「植幹明神（主家の基礎を固めた大明神）」の諡号を追尊して祀つた。

【九世の孫政方君による元明君顕彰―福間松碑の建立】

政幸君の跡継ぎである政方君は、福間松のあるこの地に、石碑を立て、先祖の元明君の勲功と、それを顕彰しようとした父政幸君の志を碑文に記して伝えたのである。

【記事】

文化三年八月、長門の山田時文が、拝礼して文を撰述した。

福間家の家臣佐々木之清が謹んで書した。

三．資料

(一)「企救郡誌」「門司市史」所収)

●福間松

「明石松の二丁半り南にあり。此松は正親町天皇天正十四年の八月、毛利輝元の殿人福間彦左衛門、大友勢と戦ひ、討死せし處也。古城傳記に、延享二年*の春、福間が末孫、此標の松を尋ねれど、知人なければ、力なく歸らむと海邊に出でしに、其傳を知し人在て、此松を教ければ、彼人此松蔭にて、里人を集て、亡靈の祭祀を営みしと云々。奴言、此姓の人、萩、長府、徳山、清末等に數家在。何れの家、何てふ君なりしか、百六十年の後、國郡を隔たる祖先を尋ね祭祀せし、其至孝の深き事そ思はる。今は碑さへ在て、千年朽さる物とはなりぬ。」

*1 延享二年…西曆一七四五年。

(二)「村誌 大里」「門司市史」所収)

●福間元明墓

「本村ノ北方笠松ニアリ。福間氏、彦左衛門ト稱ス。毛利輝元ノ臣ナリ。天正十四丙戌年、豊臣氏九州ヲ征伐ス。毛利氏之方援タリ。八月廿六日師赤間關ヲ發シ、大里ニ達、福間氏其前軍ヲ監ス。敵ノ伏兵此地ニ起ル。福間氏奮戦之ニ死ス。此地ニ埋メ、松ヲ栽テ標トス。後世福間松ト呼フト、口碑ニ傳フ。文化三丙寅年八月、福間氏ノ後孫長門人福間政方、松下ニ碑ヲ樹ヘ、事蹟ヲ詳記セリ。其松其碑今現存ス。」

(三)「門司市史」(一)(二)を引用後の文章)

「按するに、文化三年福間氏の後裔政方が建てし碑は今に存せり。然れども今碑石の在る

處の松は、所謂福間松にあらず。福間松は會社の地内となりて取去られ其の碑石今の松樹の下に移されたりといふ。」

(四)「萩藩閥閥録」(山口県文書館、一九六七)

四・主な参考資料

① 翻刻

・「門司金石記年」(一九五四、『門司郷土叢書 第二卷 (編年紀要編二村誌編一)』(門司郷土叢書刊行会編、国書刊行会、一九八二) 所収

・中村修身「北九州市の金石文集成(七) 門司区篇」『史学論叢』(四七) 二〇一七

② 論文など

・門司市『門司市史』(一九三二)

・田郷利雄『門司の歴史ものがたり(下)』(あらしき書店、一九八七)「福間元明の奮戦」

「明治三十六年(一九〇三年)大日本製糖株式会社(今の西日本製糖株式会社)の工場用地を造る際に、この石碑は、西生寺に移され、現在に至っています。松は、それ以前に枯死したと伝えられています。」

・三浦尚司『豊前国戦国事典』(海鳥社、二〇一八)

* 山田時文について

・吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』(マツノ書店、一九七六)

・『山口県史・通史編 近世』(山口県、二〇二二)

以上

二〇二四年十二月 薄井俊二訳す